

第 12 回翻訳研究分科会報告

『言葉の暴力』を読む

岸 正樹

A 「よけいなもの」とは何か

1. the remainder から「よけいなもの」へ

The remainder は通常「残り物」「残余」と訳される。本書の仏訳版では *le residu* とされ、「残りかす」「残滓」のニュアンスが強まる。この the remainder を「よけいなもの」と訳した理由は、著者 J-J・ルセルクルが the remainder を「言語学の領域においてフロイトの『無意識』に相当するものである」と説明していることによる。本書で言及される「無意識」概念の特性はいろいろあるが、その全体的な基調は「抑圧されたものの反復的回帰」と「現実と想像との境界の曖昧化」にあると思われる。これを言葉の領域に置き直してみると、ラングという秩序に「暴力」をもって立ち戻る存在、ラングからすれば抑圧の対象であるが排除したくともできない厄介な存在を意味することになる。こうしたニュアンスを、「無意識」とのアナロジカルな言葉のこの特性を考慮に入れたものが「よけいなもの」という訳語である。(注 1)

この the remainder (*le residu*) がルセルクルの独創的概念かということ、おそらくそうではない。イタリアの経済学者、社会学者ヴィルフレド・パレート *Vilfredo Pareto* が 1902 年に刊行した『社会主義のシステム』の中で、マルクス主義の唯物論を、その土台にある近代合理主義を批判して「人間の感情生活の非合理的な、表面には現れない不変の性質」を「*le residu*」と呼び、合理的知性主義に対置させている。(元?)マルクス主義者のルセルクルは、フランスで最も早い『資本論』の訳者であるパレードを読んでいて不思議ではない。

またジャック・デリダが 1980 年に刊行した『絵葉書』の中で *le residu* と類義語の *le reste* を使い、(英訳はいずれも the remainder)、「transformation としての translation (すなわち mistranslation) が後に残す偽造物」の意味をもたせている。この *le reste* はデリダの文脈では *ce reste d'analyse* (the unanalyzed remainder) の形で登場し、この概念をめぐる精神分析の運動が構築され、展開されてきたと述べられる。ルセルクルはデリダにあまり言及していないが、この『絵葉書』を読んでいないとは考えにくい。

いずれにせよルセルクルは「よけいなもの」を「無意識」と関係づけて説明しているので、あらためてフロイトの「無意識」概念について、その諸特性について考えてみたい。

2. フロイトの「無意識」概念

まず第一にフロイトが「無意識」と「前意識」とを区別していることに注意しよう。フロイトによれば「前意識は意識と無意識との間を遮蔽し、検閲を強制するものである。前意識は記憶の中核であり、比喩的に言うなら『意識の控えの間』である。」従って前意識は普段自覚せず、忘却

している場合がふつうであるが、何かをきっかけにして主体の意識に上がることがある。それに対して無意識は個人主体の認識や理解を超えたものであり、通常自分では把握が不可能である。まして意図的な操作で主体が自由に喚起できるものではない。L・ヴェヌーティは論文「翻訳の生み出す差異：翻訳者の無意識」(2002)において、後述のようにこの前意識と無意識との区別を著しく誤解して論理展開をしている。

次に本書で言及される「無意識」の特性について、「妥協形成 compromise-formation」「失錯行為 parapraxis」「機知 joke」「夢作業 dream-work」「無気味なもの uncanny」の5つの概念を中心に、その内容を確認しながらまとめてみたい。先述のように、全体を貫いている基調は「抑圧されたものの反復的回帰」と「現実と想像との境界の曖昧化」である。「言い間違い」などの「失錯行為」は「主体の意に反して実現される無意識の欲望」の現れであり、「主体の意識的意図と無意識の欲望との間の妥協」の産物である。抑圧されたものが意識に戻る(意識の中に侵入する)方法を「妥協形成」と言い、「夢や神経症の症状などのように、抑圧されたものは認知されないという条件のもとでのみ意識に回帰することができる。」意識に戻るときに「検閲」の裏をかく無意識の方途が「圧縮 condensation」や「移動 displacement」などの「夢作業」であり、また「機知」の働きである。「無気味なもの」は本書ではそれほど言及されていないが、フロイト自身単著を刊行しており(1919)、注意しておきたい。これは「抑圧されたものが戻ってくるときに我々が感じる感覚」である。ある種の懐かしさと同時に非現実なための違和感をも我々に抱かせるアンビバレントな性質を持ち、現実と想像との境界が曖昧化される場合に生じるものである。すなわち「無気味なもの」は遠い過去の、なじみのある、だが今は忘れられ抑圧されているものの与えるイメージである。

ルセルクルはこの何か根源的なもののイメージを「よけいなもの」に投影しているようだ。そこには後述するようにハイデガーの影響が見て取れるかもしれない。「『よけいなもの』が『無意識』の等価物である」とはすなわち、意識(ラング)は認めることを否定し抑圧し続けるが、意識の本質(言葉の根源)に関わるがゆえに排除できず、それどころか意識(ラング)の意に反して「夢や神経症」のように、「失錯行為や機知」を通じて「妥協」の形で、「無意識」・「よけいなもの」が繰り返し立ち戻ってくるということである。

B 「よけいなもの」への2つのアプローチ

1. ラカン派精神分析(J・C・ミルネールの「ラング」とポスト構造主義「反」精神分析(G・ドゥルーズ/F・ガタリの「リゾーム」)

ルセルクルはなぜこの一見両立し難いアプローチから始めるのだろうか。ひとつにはここに、現象的には相異なるものに通底する思考様式をさぐるようとするポスト・モダニズム的戦略を見て取ることができるかもしれない。だがそれ以上に、ここには20世紀の西欧知識人の伝統的な(半ば「強迫観念」化した?)「野心」が見られるように思われる。それは精神分析(フロイトの理論)と社会・歴史理論(マルクス主義)との統合の企てである。20世紀現代思想の源流として、思想史精神史上革命的な役割を果たしたマルクス、フロイト、ニーチェに言及するのは今日ではも

はやくリーシェ cliché であろう。20 世紀初頭においてもこれらの思想家たちの与えたインパクトは多大であり、これらの革命的思想を統合してより壮大で包括的な理論体系を構築しようとする企ても生まれてきた。とはいえ伝統的な学問の領域とりわけ社会科学の領域では、歴史的発展を説明する唯物論と無意識についての形而上学的観念とが両立するとはみなされなかった。フロイト自身も科学者を自任していたから、唯物論の考え方そのものや歴史的進歩の観点そのものは認めたが、しかし経済構造の変化だけで文化やイデオロギーの変化は説明できないと考えていた。イギリスのカルチュラル・スタディーズを代表するレイモンド・ウィリアムズも、マルクスとフロイトを結び付けるのは、非歴史的普遍的な人間本質の分析と絶えず変化する人間の歴史の現実とを結び付けようとする無益な試みであると考え、否定的であった。

それに対してドイツのフランクフルト学派やフランスのルイ・アルチュセールなどは、(正統的)マルクス主義理論の矛盾、限界を早くから洞察し、それを超克するためにマルクスの思想とフロイトの理論をより広いパースペクティブの中で結び付けようとしてきた。例えば T・アドルノは、ポピュラー音楽を批判してそれが資本主義の商品生産のシステムに組み込まれたものでしかないことを指摘する一方で、資本主義の下での疎外された労働のもたらす索漠さから逃れるためにポピュラー音楽が求められていること、そうした人間心理の働きは社会的経済的決定条件とは独立したものであることとも認識する。だがここではマルクスの思想とフロイトの理論とが並置されるだけで統合しているというには不十分であった。ルイ・アルチュセールはラカンの自我の分析にヒントを得て「interpellation 誰何—主体のあり方を決定すること」の概念を作り上げ(注 2)、それにより我々が既存の社会をいかに「自然」なものと受けとめるようになるか、すなわち主体がいかに社会的イデオロギーにより形成されるかを明らかにしようとした。だがここでもイデオロギー機能のマルクス主義的分析はなされても、「無意識」の働きの役割について十分な説明がなされているわけではなかった。かってアルチュセール派であったことを自認するルセルクルは西欧マルクス主義派のこうした野心を継承していると思われる。(注 3)

ここにポスト・モダニズムの戦略を採用しながらも、マルクス主義というモダニズムに拘泥する(囚われている)ルセルクルのアポリアを見て取ることもできるだろうが、まず 2 つのアプローチをたどりながら「よけいなもの」の特性を明らかにすることで、ルセルクルの企ての成否を見てゆきたい。

2. 「ララング」「リゾーム」とは何か

J-C・ミルネールはその著書『言語への愛』の中で「ララング」を、ラングの外部に存在するようだがその一部をなすもの、無意識におけるラングの分節化の象徴として規定しており、ルセルクルはこの「ララング」を「よけいなもの」に通じるものと捉える。「ララング」の特徴は同音性の曖昧さ、両義性を利用して言葉の内へ＜遊ぶ＞ことにあり、そうした場を「詩の生まれる点」「主体化の点」とミルネールは呼ぶ。すなわち「ララング」とは「ラングそれ自体の中であって、そのシステムを脅かす内部の境界」である。「ララング」の例として(偽)語源論やアナグラム、詩などに注目するルセルクルは、ミルネールのラカンを経由したハイデガーとの親近性を感じ取っているのであろうか。

ドゥルーズとガタリの『千のプラトー』で語られる「リゾーム」も「よけいなもの」への重要なステップである。「リゾーム」は「特権的な中心を持たず、それぞれが異質でありつつ絶えず他の異質なものと接合され、多様体を形成してゆくもの」と定義されるが、この「リゾーム」の特性は、「根茎」が非構造的なものであり、アナーキーな仕方増殖するところである。L・キャロルの世界やe.e.カミングスの詩、ハーレム黒人の英語などが例として挙げられる「リゾーム」には言葉の物質性、闘争性、暴力性がより明瞭に表れる点で、社会理論へのつながりを予感させる。

この「ラング」と「リゾーム」という一見相異なる立場の概念の共通点は、つまりそこに通底する思考様式は、ルセルクルも述べるように、まずラングの自律性を唱えるソシュール言語学への批判をそれぞれの立論の出発点としている点である。だがより重要なのは、どちらの概念も発話の主体、言説の主体がもはや自分の言葉を統御しえないということ、自分の言葉の支配者ではありえないということを明確にしている点である。フロイトの「無意識」概念ではまだ自明のものとされていた意識の主体・自我が、言い換えれば西欧形而上学の根幹をなす主体—客体の二項対立の図式が、この「ラング」と「リゾーム」において批判されているのである。

だがこれではまだルセルクルの野心の第一歩にすぎない。精神分析と社会理論(現代社会の哲学的分析)とが会っただけである。ルセルクルはそこで「ラング」と「リゾーム」そしてアルチュセールの理論的出発点へ立ち戻る。そしてJ・ラカンの「他者」の概念の検討を始める。ルセルクルは「よけいなもの」がラングの「他者」であると述べる。「他者」とは(ラカンは「大文字の他者」と呼ぶが)、「主体に先立ち、主体の外部にありながらも、主体を決定づけているものを位置づける場」と定義される。ラカンによれば、無意識は超個人的なもの、「他者」のディスクールであり、従って「他者」は言語の領域と密接に絡み合っている。例えば「他者」の中で「法」の場としてのシニフィアンが「父の名」と呼ばれるように、性や世代の区別、親族の諸関係のコード化などに関わっている。すなわち「他者」は心的生活の根本を構成するのである。

ラカンの「他者」概念はフロイトを新しく読み換え、言語学と精神分析とを結びつけた画期的なものであるが、ラカン自身が認めるように、その分析理論を共時的な側面に限定し通時的な側面を最初から除外しているため、つまり現代の個人的主体の分析に限定しているため、そもそも歴史、社会理論との結びつきも集合的事象の分析も想定されていない。そこでルセルクルはラカンの理論的背景にある、より根源的な思想としてM・ハイデガーの「存在」概念へと遡る。

ハイデガーの「存在」概念をまず「全ての存在者(=モノ)を存在者たらしめる『存在』とは、現存在(=人間)によって投企される視点のようなもの」と定義しよう。「存在」が開示されることが、ハイデガーによれば「真理の現れ」である。「存在の近み」にあることこそが現存在の根源的なあり方であり、それをハイデガーは現存在の「故郷」と呼ぶ。形而上学の時代とりわけ近代は「存在」が忘却され、現存在が存在者との交渉に没頭する<故郷喪失>の時代であるとハイデガーは捉える。それゆえハイデガーは<主体—客体>の二項対立を前提とする認識論的構図、またそれを支える形而上学を回避するために、いわば「故郷」に戻るために、「言葉」と「存在」との関係を開示するための戦略として、「die Sprache spricht 言葉が語る」のような言語遊戯ともとられかねない言説を展開する。ハイデガーによれば言葉は「存在」を顕現するもので

あり、そしてすべて言葉は本源的に詩なのである。

ルセルクルの「よけいなもの」はこのラカンの「他者」ハイデガーの「存在」概念を「契機(その物事の成立に直接かかわる、根拠・要因などの本質的要素の謂い)」として構想されている。そして「よけいなもの」概念をより深化させるにあたり、いくつかの独創的な概念を提起する。まずフロイトの(同時にラカンの)「無意識」概念の個別性、個人主義という限界に対し、ドゥルーズ/ガタリの「発話の集団的アレンジメント」概念(発話の主体はたんに集団的源泉の代弁者にすぎず、その源泉は集団的な主体ではなく、ディスクールの非主体的な組織化であるというものを)を媒介にして、言葉そして無意識の「集合性」を強調する「無名の造語者 unknown coiner」という概念を創出する。これはルセルクルによれば「あらゆる言語的变化の起源に必ず存在するのだが、その正体を突き止めることはできない神話的形象」と定義される。語る主体の消却、「起源」への指向という点で、ハイデガーの思想から着想を得ているだろう。また次には、ラカンの構造主義的精神分析が共時性にとどまるという限界に対して、通時性の観点を導入する「共時性の中の通時性 diachrony-within-synchrony」と「言語的情况 linguistic conjuncture」という概念を提起する。「共時性の中の通時性」とは「言葉の時間性が異質の要素からなる非連続的なものであること」を示すものであり、「過去と現在の言語的情况が刻み込まれている場所」である。この「言語的情况」とは、言葉が非自律的なものであるとともに、情況が恣意的で不安定なものでもあることを意味する。この2つの概念を創出するうえで、ルセルクルはアルチュセールの構造主義的マルクス主義とりわけ先述の「イデオロギー」論に大きく負っている。

こうしたルセルクルの独創的概念形成はたしかにアルチュセールの「イデオロギー」論の分析の不十分さを超えて、「無意識」の理論と言葉の歴史性、社会性の探究とを重ね合わせようとするものである。マルクスとフロイトの統合は果たして可能であろうか。

3. ルセルクルのポスト構造主義戦略

「よけいなもの」を探究するうえでルセルクルの用いている戦略的手法をここで改めて確認したい。アルチュセールの影響を受けた(元?)マルクス主義者ではあるが、ルセルクルはポスト・モダニズムの思想を積極的に摂取し、その手法を意欲的に利用している。注意すべき第一の点は、ルセルクルが「系譜学 genealogy」の視座に立っていることで、その視座から「ララング」「リゾーム」「他者」「存在」などを包括的に捉えようとしている。F・ニーチェを始祖とし、M・フーコーが大いに普及させた系譜学的手法とは、起源、連続的進歩・発展、目的—完成という構図で知や思想を扱ってきた伝統的歴史学、思想史学に対し、切断と不連続、亀裂や転移、変形や変動を知の世界に見てとり、知の隠された深層構造の動きを把握しようとするものである。これは、一見相互に異なる諸学の間に通共の思考様式が存在するという考え方、そしてこの知の<台座>が超歴史的なものではなく、特定の時代に固有の物の見方であり、それ以前の時代との間にまたそれ以後の時代との間に断絶線が走っているという考え方である。この系譜学的手法は、言葉と言葉を衝突させ、衝突の中から自明性の殻を打ち破り、殻の中に含まれている観念の古層—無意識の意味層をえぐり出すというものである。

ルセルクルが「ララング」「リゾーム」「他者」「存在」という諸概念を包括して把握しようとするとき、

これらには「近代の主体—客体の二項対立を前提とする形而上学や認識論の批判と超克」という知の〈台座〉の存在を見て取ることができる。それゆえポスト構造主義が一つの時代を画す思潮と捉えられるのは系譜学的に見て当然のことである。だが忘れてはならないのは、系譜学が歴史学を相対化するものであるということだ。系譜学的手法は先の定義のように、普遍的歴史法則の存在を否定するものであり、従ってマルクス主義の唯物史観も否定の対象となる。かくして系譜学的視座に立つ戦略からは、ルセルクルの野心の追求は挫折せざるを得ない。

ポスト・モダニズムの第二の戦略的手法としてルセルクルが利用するのは「ミスプリジョン(創造的誤読)misprision」の手法である。「ミスプリジョン」はアメリカのイェール学派(注4)の一人、英文学者、批評家ハロルド・ブルームの提起した「リヴィジヨナリー・セオリー(創造的修正理論)」というテキスト読解の戦略的概念である。これは「後から来た詩人が、先行詩人の発揮する『影響』力の及ぼす『不安』を克服し、すなわち自らの『後発性』『劣等性』を克服して、詩人としての自らのアイデンティティを確立するため、積極的かつ防衛的な『ミスプリジョン』によって、先行詩人による『影響』を間断なく修正 revise してゆく」というものである。(注5)この先行詩人を父に、後発詩人を息子に置き換えてみると、フロイトの「エディプス・コンプレックス—父親殺し」の理論の「創造的誤読」であることがわかるだろう。ブルームの考えによれば、先行テキストはつねに誤読を許す開かれた状態にあるため、後からの解釈はつねに影響に抗して防衛するための「修正 revision」になる。

ルセルクルは諸概念が他の領域や他の文化伝統から輸入される過程において、またその過程を描き出す場合において、「ミスプリジョン」が不可避であり、かつまた有効性を持つと考えている。ルセルクルのこの「創造的誤読」理解に基づくと、次のようなテキスト相互の諸関係が浮かび上がる。

マルクスをアルチュセールが読み換え、アルチュセールをドゥルーズ/ガタリが読み換え、ドゥルーズ/ガタリをルセルクルが読み換える。フロイトをラカンが読み換え、ラカンをアルチュセールとミルネールが読み換え、アルチュセールとミルネールをルセルクルが読み換える。ハイデガーをラカンが読み換え、ラカンを……。

この諸関係の連鎖を思い浮かべると、マルクスとフロイトがルセルクルの中で統合され、ルセルクルの野心が成功するかのように見える。だが重大な難点がある。ポスト・モダニズムの立場からすれば、「修正」という「転位/位置のずれ displacement」を媒介として生まれる相互テキスト性の空間においては、マルクスもフロイトもそしてルセルクルすらもが壮大な意味の連鎖のたんなる一環にすぎないものとなり、意味生産の主体が消滅する。そのため統合そのものが意味を喪失し、かくしてルセルクルの野心そのものも潰えてしまう。

C L・ヴェヌーティと「よけいなもの」

1. ルセルクルの翻訳観

『言葉の暴力』においてルセルクルは、ハイデガーの翻訳観に少し触れているのを除くと、翻訳それ自体についてはあまり言及していない。ハイデガーの翻訳観によれば「自分の母語の本来的なありようの中に深く分け入ることによって可能となる」「存在」との対話、思索と「言の伝説」との間の対話が翻訳である。母語には「存在」の顕現と隠蔽という本来的な関係が含まれており、「存在」の姿が見えてくるより深い本来的な次元において、はじめて二つの言語の翻訳は可能である。全て言葉は本源的に詩であるから、翻訳は「詩作 poetizing」である。こうしたハイデガーの翻訳観を受けてルセルクルは「主体の母語で言い表わされた発話においては『よけいなもの』を退けることは決してできず、翻訳の困難さの原因はここにある」と述べる。ルセルクルが強調するのは、「よけいなもの」が「存在」の対話に関わるからこそ、言葉の起源に負うものであるからこそ、母語に深く分け入るからこそ、翻訳が困難なのだという点である。ハイデガーもルセルクルもここではあくまで西欧の形而上学的伝統を脱構築する哲学的思想的戦略の一環として翻訳を問題にしているのであり、「存在」への接近と対話のため翻訳において「母語」や「詩」との関わりが強調されている。

ヴェヌーティはルセルクルの先の叙述に着目し、それを『よけいなもの』が翻訳する側の言語と文化の中でのみ働く」と読み換える。そしてこの「よけいなもの」のミスプリジョンとデリダの『絵葉書』所収の *le reste* の概念 (*le reste d'analyse: the unanalyzed remainder* が無意識の内に翻訳を通じて伝えられるという点)とを結びつけて「よけいなもの」を「独創的に」読み換えてゆく。すなわち「翻訳が後に残す偽造物」が無意識に伝えられるがゆえに、デリダにおいては(またルセルクルにおいても)翻訳の不可能性のしるしとなるものが、ヴェヌーティでは外国語のまたその文化の「母語化 domestication」のしるしとなる。

2. ヴェヌーティの「よけいなもの」の創造的誤読

L・ヴェヌーティの「翻訳の生み出す差異：翻訳者の無意識」(2002)は興味深い論文である。それはヴェヌーティの「よけいなもの」のミスプリジョンが見事だからではなくて、ヴェヌーティの誤った解釈を分析してゆくと、時代思潮の変化やフランス現代思想の受容のアメリカ式メカニズムがはっきりと浮かび上がってくるからである。

ヴェヌーティは問題の論文において「無意識は前意識から区別しなければならない」とか「無意識は個人の認識、理解を超えており、本人には把握不可能で、他人にのみ把握できるものである」と述べているにもかかわらず、別の個所では『よけいなもの』が翻訳する側の言語と文化の中でのみ働き、受容者側の言語的文化的社会的状況を反映する」とか「『よけいなもの』は意図的に解放することができる」のように、つじつまの合わない説明をする。このような矛盾や誤解は少なくないが、注意すべき点をまとめると(1)ルセルクルは(ラカンもハイデガーも)「言葉」「言語」そのものを対象としているのに対して、ヴェヌーティは「起点言語SL」と「目標言語TL」とに分割し、「目標言語」にのみ「よけいなもの」を関係づける。(2)言葉や文化の差異は集合的なものであり、それゆえに「症状」としての誤りが個人的要因を超えた横断的な無意識の働きを露わにすると述べるにもかかわらず、ヴェヌーティは翻訳者の無意識を「著者への挑戦である」とか「意図的に解放しうる」のように個人主体の次元に還元して説明しようとし、そして集

合性の側面を無視できない局面では「たんに個人的なものではなく、政治的なものでもある」のように政治性へ一面化する。

だがこうした「無意識」概念の誤解、「よけいなもの」の歪曲以上に重要なのは、ヴェヌーティの戦略的キーワードである「母語化 domestication」の内容である。

ヴェヌーティは問題の論文で『よけいなもの』は『domestication』の過程のしるし、外語テキストを同化させる働きのしるしである」と述べる。例えばA・バスによるデリダのテキストの英訳を批判するように、英語に domesticate された翻訳をヴェヌーティは一貫して批判しているが、ヴェヌーティも認めるように、同化の前には常に差異があり、この差異は還元不可能なものである。「よけいなもの」は本源的な ST と TT との間の差異を露わにし、異質性を明確にするために、domestication に対抗する foreignization(外語化)の戦略ともなる。この点はヴェヌーティが『翻訳というスキャンダル』などの他の著作でも繰り返し述べていることである。つまり、ヴェヌーティの中では支配言語とりわけ英語における場合と被支配言語における場合とでは domestication のありようが、その戦略的位相が異なってくるはずであるにもかかわらず、理論的整理が不十分なために、用語、概念の使用に曖昧さがみられる。「よけいなもの」の説明の仕方が、両義的になってしまうのである。

3. ヴェヌーティの「誤読」の背景

「よけいなもの」が「目標言語」の「言語的文化的差異」に還元されてしまった背景には、ルセルクルの批判の対象とヴェヌーティの批判の対象との違いがある。それは西欧形而上学の伝統への批判から英語帝国主義への批判に変化したこと、哲学の領域から政治学の領域へ闘争領域が変化したことである。ヴェヌーティの意識には翻訳をめぐる英語中心主義への批判、英語と非英語との間の不均衡性、非対称性への批判がまず第一にあり、この構造的格差の問題が翻訳においては原著(者)と翻訳(者)との間の優劣、支配—従属関係として捉えられている。翻訳者の不可視性 invisibility のような翻訳をめぐるこうした差別構造の根本にあるのが domestication の問題であるが、この概念のはらむ問題点については既述のとおりである。ヴェヌーティはポスト・コロニアリズムを視野に入れてトランスレーション・スタディーズを発展させてゆこうとしているようだが、理論的基軸を十分に打ち出しているとは言い難い。むしろヴェヌーティのこの論文(そして他の著作)にはヴェヌーティ自身が意識しないところで、異文化受容についてのきわめて興味深い特色が見られるので、そこに注意を促したい。

4. フランス現代思想のアメリカ的受容のメカニズム

現代フランス思想界を指導する若手の一人にフランソワ・キュセ Francois Cusset がいる。その著書『フレンチ・セオリー-French Theory』の中で、キュセは 20 世紀後半のアメリカで、フランスのポスト構造主義の思想家たちがいかに熱狂的に受け容れられ影響を与えたかを、そして同時にその過程でこのフランス現代思想が「フレンチ・セオリー」としていかに変貌していったかを分析している。このキュセの理論を導きの糸としてヴェヌーティの「ミスプリジョン」の特徴を考えてみたい。キュセは、フランス現代思想をアメリカが受容してゆくプロセスにはある種のメカニ

ズムが存在すると総括している。そしてこれはフランス現代思想に限らず、外来文化をアメリカが受容するパターンとしても捉える事が出来るだろう。メカニズムの第一は、テキストの「脱文脈化 decontextualisation」と恣意的再編集である。ヴェヌーティの「よけいなもの」の読み換えはまさにその良い例であろう。それは何のためか。メカニズムの第二は、翻訳の際に、原著と翻訳との間の均衡や等価性を考慮せず、モチーフや定式を選び出してアメリカ人が使いやすいように、明晰さや合理性を基準として変形するが、そのとき仏語テキストの持つアイロニーや多声性が無視されるということだ。そのため生まれたテキストは通俗化した汎用的な道具と化す。アメリカにおいて「デリダ」や「ディコンストラクション」などがキャッチフレーズと化し、『デリダと○○』とか『××のディコンストラクション』とかの書物が氾濫したのを見ると良く分かるだろう。だがキュセはこのアメリカ化をただ非難するのではなく、このアメリカ化の逆説的な積極面をも見逃さない。メカニズムの第三は、フランス現代思想が通俗化し道具化した半面、英訳されることで読者層の世界化の条件も手にするようになったということである。フランス語のままでは限られた読者層しか獲得できなかったものが、英語の覇権性を利用することによって普遍性を手にし、それが例えば、ポスト・コロニアリズムなどのマイノリティの言説の闘いに寄与するという局面が生じてくる。デリダやフーコーの思想が英訳されたことで、逆説的ではあるが、その思想の持つ革命性が多大な影響力をもつようになったのである。

ヴェヌーティの「よけいなもの」の創造的誤読のプロセスは、キュセが述べている外来思想受容のアメリカ式メカニズムをきわめて明瞭に体现しているといえよう。このメカニズムは言いかえれば、アメリカン・プラグマティズムのもたらす **domestication** のメカニズムでもあろう。英語帝国主義を批判し、ポスト構造主義の思想に理解があるはずのヴェヌーティですら、意識せずにこのメカニズムを、**domestication** を実践しているところに、問題の根深さを感じざるをえない。皮肉なことである。

.....
【著者紹介】岸 正樹 (KISHI Masaki) 翻訳家、河合塾講師。英米仏の批評理論、翻訳理論を研究。

(注 1) この訳語は『言葉の暴力』の「あとがき」にも記したとおり、評論家の柳父章先生との議論の中で生まれ、先生のアイデアを拝借したものである。

(注 2) 「interpellation」の概念はポスト・コロニアリズムの状況下での「主体」形成の問題とからめて T・ニランジャナも注目している。

(注 3) この野心は現在でもアメリカの F・ジェイムソンやスロヴェニアの S・ジジェクの精力的な理論活動において追求されているようである。

(注 4) 1970 年代アメリカの人文系学界とりわけ文学、批評の分野で一世を風靡し、多くのエピソードを生んだディコンストラクション批評の流派。

(注 5) この定義、説明は英文学者高山宏氏の卓抜な要約である。この場を借りて氏に謝意を表し

たい。

*本稿は2010年3月27日に行われた第12回翻訳研究分科会での発表にもとづいて著者自身
が書き下したものである。この分科会では、ジャン＝ジャック・ルセルクル(岸正樹訳)『言葉の暴力
「よけいなもの」の言語学』(法政大学出版局)を取り上げた。